

アーチェリー競技におけるパーソナリティ特性の研究

A study of personality characteristic in Archery

1 K 0 8 A 1 7 4 - 7 長谷川 貴大

指導教員 主査 山崎 勝男 先生 副査 正木 宏明 先生

【目的】

スポーツで競技者のパフォーマンスを評価するとき、しばしば選手が競技に向いている、向いていないと評価することがある。身体や技術のレベル、内的・外的から心身に受ける影響が同じだと仮定して試合をしてもスポーツは勝負であるため必ず勝者と敗者に分かれる。その条件で勝敗を分けるモノは何か。

韓国は、アーチェリー競技がオリンピック種目となったミュンヘンオリンピックから北京オリンピックまで男女合わせて30個ものメダルを獲得してきた強国である。その韓国では、12歳までの一般人をコーチが直感で「何か」を見極め指定選手にする制度がある。韓国中からパーソナリティが適正だと思われた一般人だけが招集され、競技者として活動を始めるのである。判断基準は直感であるというが、コーチが選手を育成した経験がもたらすものであり、アーチェリー競技に向いているパーソナリティ特性において一定の共通点が存在すると推測できる。競技に向いている、向いていないと評価される要因が競技とパーソナリティ特性の適性という側面があるとするならば、勝敗を分ける「何か」は個人特有のパーソナリティの違いであるのか。アーチェリー競技に向いているパーソナリティ特性を明らかにしたいと考えた。

【方法】

本研究では競技パフォーマンスの高さを基準に2つのグループに分けて、3つのパーソナリティテスト（内田クレペリン精神検査、NEO-FFI、YG性格検査）を実施した。グループ間でパーソナリティの違いが結果に現れた場合は、競技パフォーマンスに影響を持つ要素であり、グループ間で同一の結果が現れた場合はアーチェリー競技にみられる共通の要素であると考察できるためである。被験者は20～22歳の男性で、アーチェリー競技経験が3年以上ある現役の選手を対象とした。

グループ分けは、大学の主競技である50・30m競技の直近3試合のスコアを基準にした。グループ1（10人）の試合平均スコアは650～720満点でありトップクラスの選手群である。グループ2（10人）の試合平均スコアは550点～600点以下であり一般平均

または平均以下の選手群である。

【結果】

内田クレペリン精神検査の結果は、誤答数に差が確認された。誤答総合計でグループ1が37回、グループ2で125回と約3倍の差を示した。曲線判定は、作業量と質を判定したところ両グループが定形を示した。

NEO-FFIでは、尺度N（情緒不安定・神経質傾向）にグループ間で優位差がみられた。その他の尺度ではグループ間で優位差はみられなかった。

YG性格検査では、尺度D（抑うつ性）、I（劣等感）、N（神経質）、T（思考的外向性）にグループ間で優位差がみられた。性格類型では、安定積極型のD類を示した選手が競技パフォーマンスが高く、E類の選手はパフォーマンスが低かった。なお、D類を示した内の2選手は、2011年の全日本選手権で活躍した。

【考察】

内田クレペリン精神検査では、作業量とパフォーマンス水準の関係性は確認できなかった。誤答数は差が確認できパフォーマンスが高い選手は思考内向性であることを示した。

NEO-FFIでは、パフォーマンスの高い選手ほど情緒が安定していることを示した。

YG性格検査では、パーソナリティの高い選手ほど悲観的でなく自信があり、プラス思考。心配症、神経質な傾向は少なく、熟慮的で反省的なパーソナリティを持っていることを示した。

3つのパーソナリティテストの結果から競技パフォーマンスの高い選手は、低い選手と比較して、以下の点で優れている事が明らかになった。1)情緒が安定している、2)適度な積極性がある、3)自制心がある、4)思考内向性である、5)社会適応力が高い、6)外向的である、7)抑うつ性が適度に低い、8)劣等感が適度に低い、9)神経質傾向でない、10)安定積極型であり、多方面でリーダーシップを発揮できる。このようなパーソナリティ特性を持った人物はアーチェリー競技に向いているのである。